

## 第2回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

### 1 前回のテーマに関する参考意見など

- ・棚尾公民館音頭について資料提供があった

### 2 テーマ3 「火の見やぐら」

- (1) 資料説明（磯貝国雄）
- (2) 出席者による補充説明、感想など

### 3 テーマ4 「杉村修平」

- (1) 資料説明（磯貝国雄）
- (2) 出席者による補充説明、感想など

### 4 連絡事項・情報交換など

- ・参考意見やテーマ発表に必要な資料のコピー料は、まちづくり推進委員会が負担しますのでご利用下さい。（ふれあい館、図書館、碧南市市史資料室）
- ・資料の予備をふれあい館に置きますので、他の人への説明などにご利用下さい。

情報交換など

### 5 次回日程

- |     |             |        |         |           |
|-----|-------------|--------|---------|-----------|
| 第3回 | 9月22日（木曜日）  | 午後7時から | 「地震の記録」 | 「棚尾神楽」    |
| 第4回 | 10月27日（木曜日） | 〃      | 「棚尾橋」   | 「源氏橋と棚尾港」 |

棚尾公民館の歌・音頭発表会

昭和54年3月3日

この年度の 幹事長：岩間順一 公民館長：成瀬武夫 主事：斎藤照彦

棚尾公民館音頭

(作詞) 生田 砂男 (作曲) 高松 雄二 (伴奏) 民謡八乃重会 (振付) 西川 糸鶴

一 ソーダナン ソーダナン

ハァー 棚尾よいとこ 南と北の

虹のかけ橋 なかどころ

夢もふくらむ 夢もふくらむ 公民館で

堅く結ぼう 郷土愛 ソレ

ソーダナン ソーダナン

二 ソーダナン ソーダナン

ハァー 古きゆかりの 矢作の河口

町にゃ自慢の 毘沙門天

弥生の水の 弥生の水の 八柱神社

響くチャラボコ なつかしや ソレ

ソーダナン ソーダナン

三 ソーダナン ソーダナン

ハァー 明日の碧南 俺とで築こう

老いも若きも 共々に

心ゆたかな 心ゆたかな 文化の町を

今日も語ろう 公民館 ソレ

ソーダナン ソーダナン

棚尾公民館の歌

(作詞) 生田 砂男 (補作) 碧南市教育委員会 (作曲) 小笠原 テル子

歌詞は棚尾公民館音頭と同じで、囃し言葉のみ異なる …… 省略

# 棚尾公民館音頭

四分ノ二拍子

(二上り)

10	10	10	111076	1074	6	66	44	464	0
0			ハ	0		ス	0		ハ

464	6	66	00	3	0	00	44	3	0	00
0	ウ	0	ス	00	3	0	ス	3	0	ス

(ソ-ダナン——ソダナン——)

7	7	77	6	76	10	7	66	4	6	66
0		ス					ス			ス

ハ たなおよ い と —— ニ ——

47	6	64	64	0	00	44	47	64
0			5	0	ス	5		

みなみ と きた の —— だじの かけはし

10	ス	00	333	00	3	0	110	44	0
0	1	0	00	3	0	0	1	4	5

なかどころ —— ゆめも ふくらむ ゆめも ふくらむ

47	64	6	6	10	10	1010	10	1110	7	6
		0		0						

こ みんなで かく —— むすほう ——

7	64	4	66	4	6	66	00	3	0	00
0	5	4	ス	0	4	ス	00	3	0	ス

きよ じあ い —— (ソレ) (ソダナン ——

44	3	0	00						
			ス						

ソダナン ——)

# 棚尾公民館の歌

$\text{♩} = 96$

Handwritten musical notation for the piano introduction, including treble and bass clefs, a key signature of one sharp (F#), and a 2/4 time signature.

*mf*

Handwritten musical notation for the vocal melody, including a treble clef, a key signature of one sharp (F#), and a 2/4 time signature. The tempo is marked as *mf*.

1. た なお よ い と こ み な み と き た の  
 2. ふ る い や か り の や ほ ぎ の か *imp*

に じ の か け は し な か ど こ ろ ち め  
 ま ち に や じ ま ん の び し や も ん て ん や よ

も - ふ く ら - む  
 の み - ず - の

こ う み ん か ん で -  
 や は し ゅ ら じ ん じ ゃ (V.L.)

か た く む す ぼ う き ょ う ど あ い  
 ひ び く 4 ヲ ラ ホ コ な つ か し や

ソ ダ ナ ン " " " " " " " "

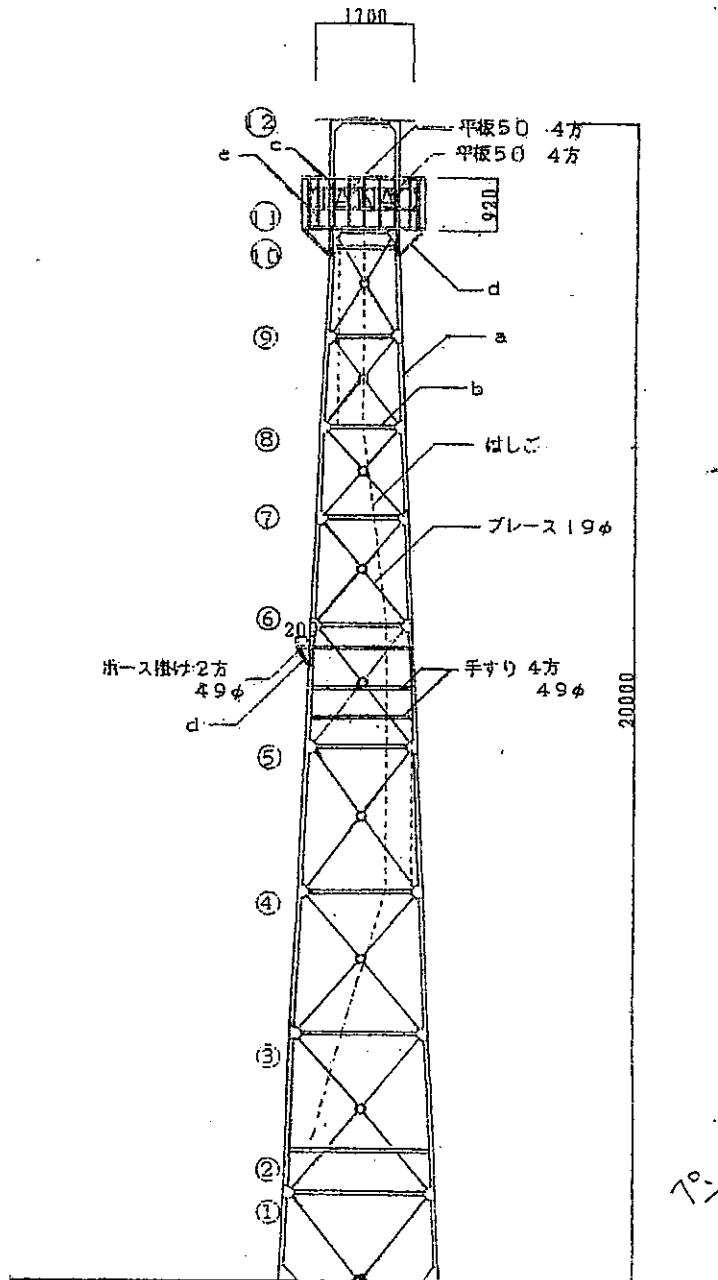
ソ ダ ナ ン ホ イ ホ イ  
 " 4 " "

## 「火の見やぐら」

### 1 要旨

大正13年(1924年)棚尾が町制をしいたのを記念して建造された。地区の中心に有り、永年に亘って住民の安全を守って来た。高さは70尺(21m)。現在も地元消防団のホース干し等に活躍すると同時に地区のシンボルである。望楼上の柵は鋼鉄製、ローマ字で「TANAO」と作られており、そのモダンな造りは、地区民の自慢である。

### 2 立図面



### 3 町制に伴い整備された消防組織

- (1) 木製の火の見やぐらを鋼鉄製に造り代えた。
- (2) ポンプをガソリンエンジンにする。

### 4 棚尾町公設消防組規則 資料

大正13年10月2日 評議会に於て議決確定す (原文のカタカナはひらがなに  
変換した。)

第1条 棚尾町公設消防組を設置す

第2条 公設消防組は警察署長の命令に依り火災水害夜警其他非常事変ありたる時は即時  
出動して救済の任務に服するものとす其他必要ありと認むる時は組頭に於いて信  
号又は其他の方法に依り即時出動を命ずることあるべし

第3条 当町消防組を分かちて二部とす  
第一部は東部西部南部を地区とす  
第二部は北部を地区とす

第4条 公設消防組に左の役員を置く  
組頭 1名 幹事1名 主計1名 評議員12名 第一部小頭一名副小頭二名  
第二部小頭副小頭二名

第5条 組頭は町長之を兼任す 町長事故ある時は助役之を代理

第6条 組頭は公設消防組一切の事務を総理し会議の議長たるべし

第7条 小頭及び副小頭は現場に出動し消防手を指揮するものとす

第8条 評議員は町会議員を以て之に任す

第9条 評議員は会議に列し議長提案を審議するものとす

第10条 幹事は帳簿を整理す

第11条 主計は会計を司る

第12条 第一部の小頭副小頭は評議員会にて選定し組頭之を任命す

第13条 第二部の小頭副小頭は北部に於て選任す

第14条 幹事主計は組頭より評議員の協賛を得て組頭之を任命す

第15条 小頭副小頭消防手幹事主計の任期は二カ年とす

第16条 第一部第二部の経費は各々別に処理す

第一部消防組経費は町税戸数割に基き東西南の三部より毎年四月九月の二回  
に之を徴収す

- 第17条 第二部消防組の経費は北部に於て適宜徴収す
- 第18条 組頭は毎会計年度前に於て其収入支出の予算を調整し評議員会の議決に付すへし
- 第19条 会計年度は政府の会計年度に拠る
- 第20条 決算は年度後三ヶ月以内に証拠書類を添え主計より組頭に提出し組頭之を審査し評議員会の認定に付す
- 第21条 収入支出差引剰余金ある時翌年度へ繰越すものとす
- 第22条 第一部消防手63名とす東部22名西部21名南部20名  
第二部消防手は40名とす
- 第23条 消防手を選抜するに各部は伍々長及び部長に於て予選し組頭に報告すべし組頭は右報告に基き更に評議員会に提出して之を確定す
- 第24条 消防手決定すれば組頭に於て部長及び伍々長を経て各本人に通告すべし
- 第25条 小頭副小頭消防手幹事主計には毎年手当を支給す 支給方法は別に之を定む
- 第26条 消防には服装其他必要品を支給す 支給方法は別に之を定む
- 第27条 公設消防の物品及金員を寄附するものある時は組頭の名を以て謝状を贈り寄附者の姓名を簿冊に録し永久之を保存す
- 第28条 本規則の改正を要する場合には評議員会の決議に依るものとす

## 5 棚尾消防組人名簿

大正13年10月1日現在

総人員 68名

組頭(町長) 小笠原半兵衛 組頭代理(助役) 斎藤力之助

小頭 1名 井上万吉

副頭 2名 石川重次郎 石川清松

消防手 63名

伍長	団			員
角谷義雄	小林安吉	亀島紺四郎	鈴木梅吉	杉浦桐松
長田信市	亀嶋與吉	榊原由松	永坂重松	斎藤市松
斎藤竹一	榊原金一	小笠原竹三	杉浦太市	杉浦千代吉
鳥居半二郎	斎藤源二郎	岡田吉ノ助	井上盛清	榊原近太郎
	杉浦賢市			

伍長	團	員		
鈴木金七	杉浦 静	金原量太郎	永坂逸雄	永坂定市
杉浦重市	榊原静二郎	杉浦福松	永坂伝市	永坂鶴松
石河貞雄	三嶋貞市	杉浦忠次	竹田孫市	石川竹市
黒田初太郎	石川與市	小笠原繁松	小沢万二郎	榊原利市
	小沢宇三郎			
石川善兵衛	杉浦富市	池田徳二	斎藤岩太郎	浅田初雄
小笠原巳ノ作	永坂又三	永坂長二郎	小笠原明市	斎藤喜市
古久根近作	永井久吉	斎藤ぎ婆吉	杉浦銀作	榊原銀作
金原市松	清水竹五郎	平岩市松	辻源二郎	榊原栄太郎
	斎藤定衛	榊原才一郎	石川喜一	

6 棚尾にあったその他の火の見やぐら

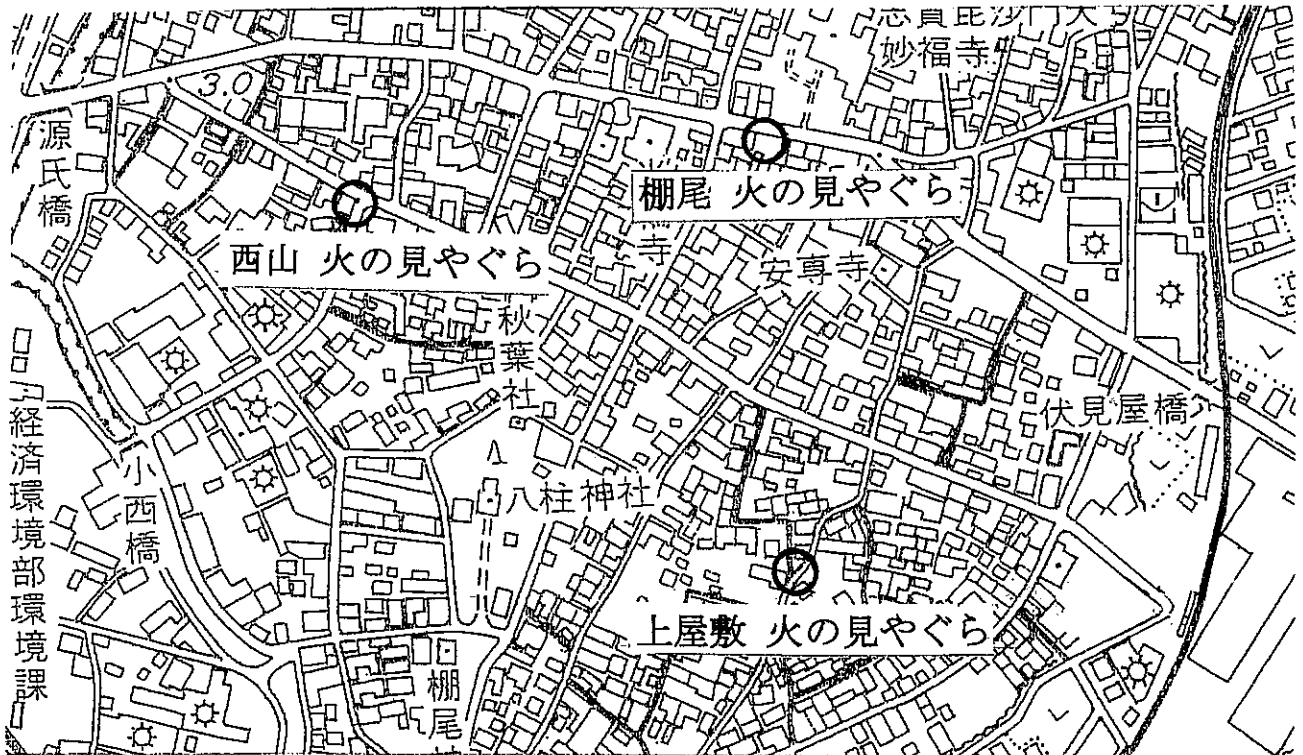
(1) 字上屋敷

昭和 20 年代まで、木造のがあった。

(2) 字西山

昭和 20 年代まで、木造のがあった。

位 置 図





## 7 その他の町制祝賀行事

### (1) 棚小校門の門扉を平岩種二郎氏が寄贈

パッキンガム宮殿を模したもの

### (2) 祝賀の歌

大正3年生まれの女性からの聞き取り（平成19年5月26日）

ここに大正 十三年 めでたき年の 初めより

町と変わりし 我が棚尾 祝えや祝え もろともに

矢作の流れ 水清く 五千の人よ もろともに

力の限り 尽くしなば 町の光ぞ 輝かん

## 8 お聞きした話

- ・ 戦時中、鉄製品の供出時に町長が、この塔は高いので遠くまで見渡すことが出来、監視塔としての役目があり必要であるとの説明で、供出を免れる。
- ・ 中段に半鐘があった。
- ・ 毘沙門さん通りの道路拡幅が昭和6年に完了している。火の見やぐらの辺りもこの道路拡幅工事に合わせ整備されたと思われる。

## 「杉村 修平」

### 1 要旨

天保9年(1838年)生まれ、幕末から明治期に活躍した棚尾の医者で文人。藤井達吉も幼い頃教えを受けた。妙福寺に懿文<sup>いぶん</sup>徳碑<sup>とく</sup>がある。

### 2 人物紹介

資料「碧南市医師会史」(昭和43年5月編集)110ページ

杉村修平に就いては、棚尾妙福寺境内にある翁の懿文徳碑に基づいて述べる。翁は棚尾の人、父は弥四郎で売薬業であった。天保9年12月の生まれで財、公成、豊台等の別名が学者文人の常としてあった。

幼より学を好み、妙福寺の和尚秀楷師より句読を、三宅洪庵より書法を学び、19歳の時名古屋に出て、奥田大観より経史を、麻生白処より蘭学を、更に枡田良平より医術を学び、留まること10年にして、慶応元二年頃棚尾に帰って、医者を開業した。その傍らに塾を開いて子弟の教育に努められた。棚尾の生んだ大芸術家藤井達吉も初めこの塾で教えを受けられた。翁は漢詩を好み、有名人とも交友も多かった。幕末の頃、菊間藩侯に召されて二等医となった。

創立当時の協療社員であり、明治9年7月に種痘免許医となっている。明治末年頃、遠州舞阪へ退去されて子鑑爾、孫、四登志が現在舞坂で開業中である。その旧邸に斎藤又三郎が住んだが、今はそこで近松医が開業している。

### 3 作品紹介

資料「碧南市史」第2巻 430ページ 漢詩文

遊嵐山 杉邨 水庵(財・修平)

(嵐山に遊ぶ)

曾把看書眼 (かつて、書を見る眼を得ることができた)

来看開謝花 (花の咲くことや散ることを見てきた)

栄華真似夢 (栄華、真に夢に似たり)

事々易蹉蛇 (何事もつまづき易く、思うにまかせない)

#### 4 懿文徳碑の製作に関する人物

##### (1) 篆額「東久世通禧」(ひがしくぜ みちとみ)

1833～1912年(天保4～大正1)幕末・維新期の尊王攘夷派公卿。東久世通徳の子。号を竹亭・古帆軒。幕末尊王攘夷派公卿の1人として重きをなし、1862年(文久2)国事御用係、翌'63年国事参政となったが、同年8月18日の政変で三条実美らの公卿たちとともに長州藩兵に守られて西走(七卿落ち)।'67年(慶応3)王政復古で帰洛。参与となり、ついで外国事務総督・外国官副知事などを歴任。さらに兵庫鎮台・兵庫裁判所総督となり、議定職についた。のち元老院議官、枢密顧問官となり、貴族院副議長・枢密院副議長もつとめた。著書 高瀬真卿編「竹亭回顧録—維新前後」1911年

##### (2) 文「石川鴻斎」(いしかわ こうさい) 岩波書店「国書人名辞典」

漢学者(生没)天保4年(1833)生～大正7年(1918)9月13日没 86歳 墓東京三田竜源寺(名号)英 字君華。号鴻斎 芝山外史、雪泥処士。法号雲泥庵漸誉鴻斎。(経歴)三河豊橋の人 初め三河吉田藩儒 西岡翠園に入門 のち岡崎の曾我耐軒に從学し、詩文・書画を能くした。明治初年上京して増上寺の学林の教授になり、来日した何如璋(こうじょしょう)らの清国人と交遊して名声を得た。維新後も詩文に関する多くの著書を出版した。

#### 5 藤井達吉に関する資料紹介

##### (1) 「藤井達吉遺歌集」発行 瀬戸市 緒言 栗木伎茶夫

短歌

修平先生の とがりづきんを おもいでにき 矢作堤に あひし春日ぞ

##### (2) 「藤井達吉翁写真集」

達吉の同級生である黒田芳太郎の話

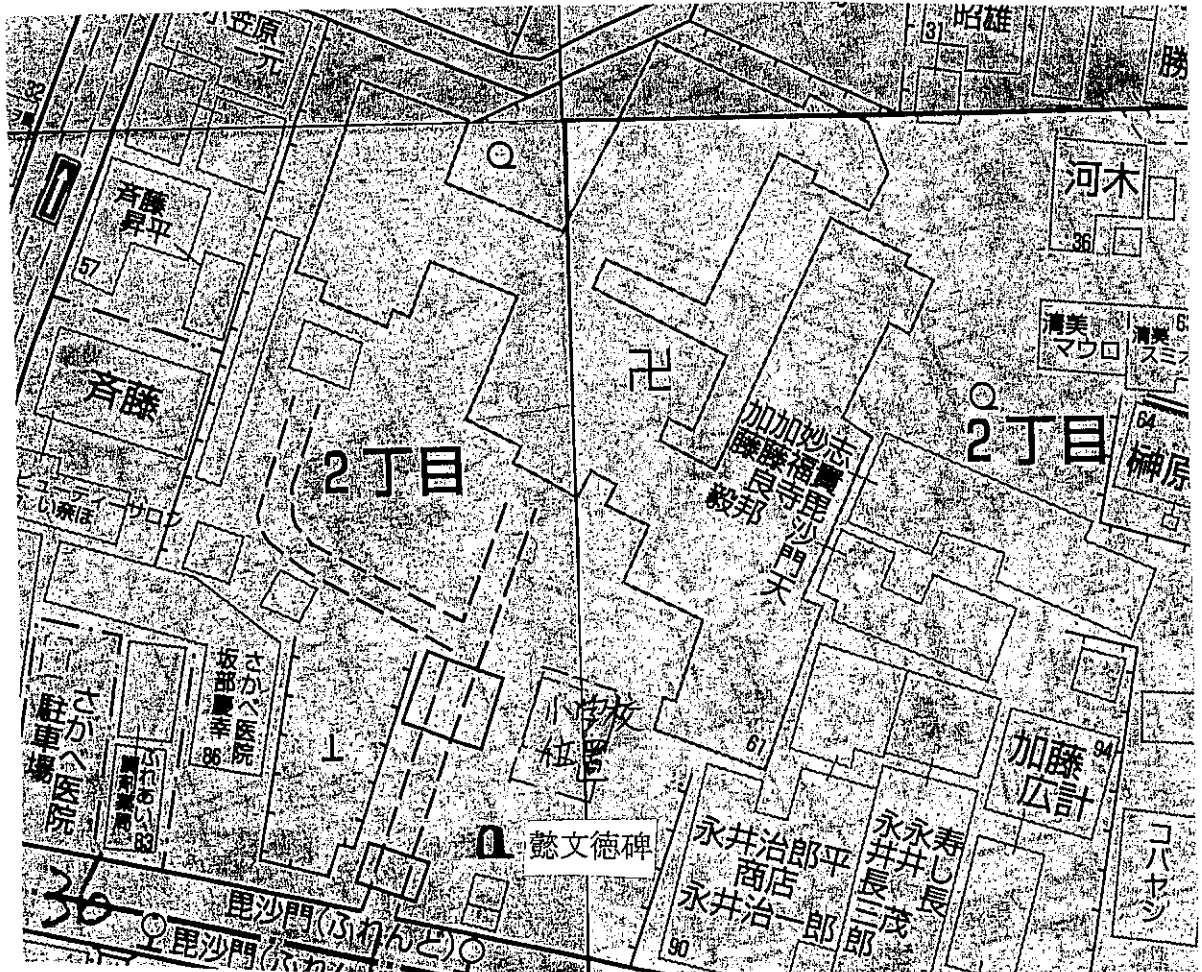
「達吉の先生は、杉村修平と杉浦玉二郎」

##### (3) 同上資料

当時の棚尾小学校は独立した校舎を持たず、60名ほどの児童が庫裏と別棟に分か

れて授業を受け、子供たちは庫裏を「古学校」、別棟を「本学校」と呼んでいたというから複式の二学級制であったのであろう。

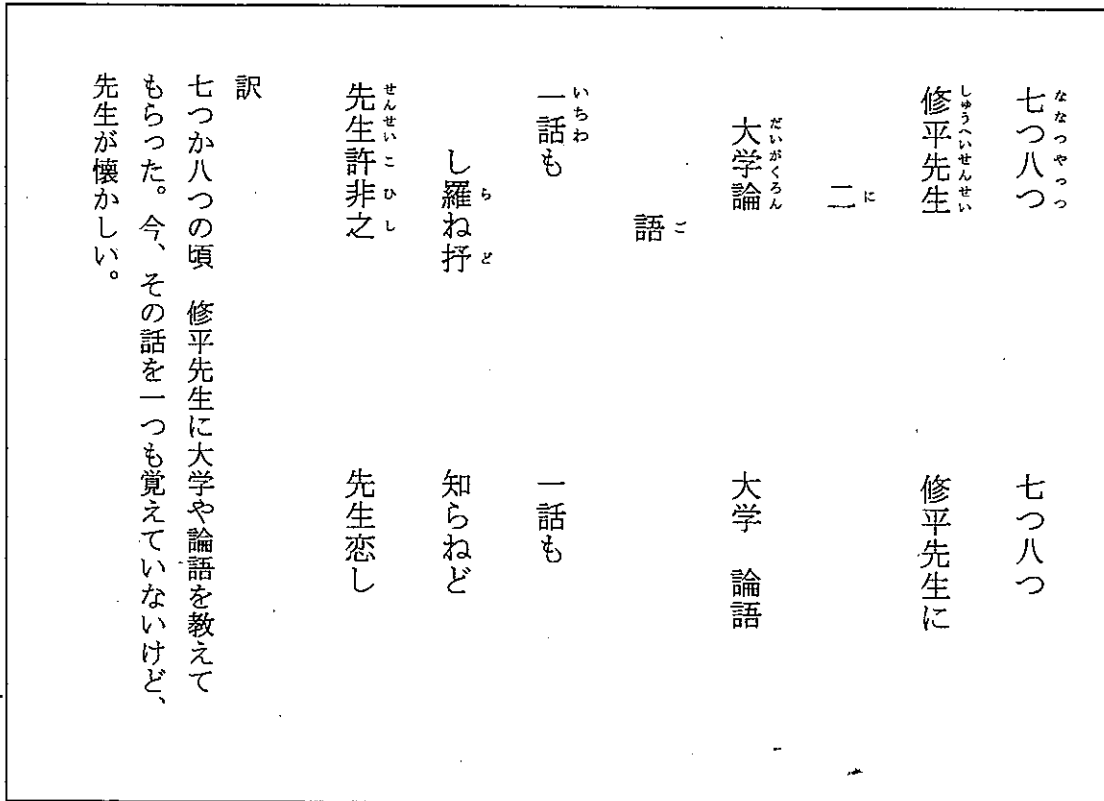
6 参考地図



(小笠原幸男氏資料)

碧南市藤井達吉現代美術館の常設展で、『やまのさち』という巻物（藤井達吉喜寿の作品）の8番目の詩の中に杉邨修平先生を見つけました。

(2010. 9. 3)



杉村修平 天保9年（1838）に棚尾で売薬業をしていた杉村弥四郎の長男として生まれた。

幼児より学を好み、妙福寺の秀楷和尚より読み書きを習った。19歳の時名古屋に出て、麻生白処より蘭学を、榊田良平より医術を10年間にわたって学習した。

慶応元年ころ棚尾に帰って村人のために開業し、菊間藩の二等医師を勤めた。また、近所の子供たちを大勢集めて塾を開き、読み書きを教えた。郷土の生んだ大芸術家藤井達吉も、幼いころ杉村塾で教えを受けたという。

修平は漢詩を好み交友も多かった。創立当時の協療社員となり、明治9年に種痘免許医として伝染病の予防にも努めた。棚尾の妙福寺に頌徳碑が建っている。

(碧南事典より)

懿文徳碑

建立年月 明治四十年九月  
建立者 門人  
所在地 志貴町二丁目(棚尾 妙福寺)



高243cm×幅131cm

表面

懿文徳

(上部横書)

懿文徳碑 正二位勳一等伯爵東久世通禧篆額

孟子得天下英才而教育之為君子三樂之一况仰不愧於俯不忤於人如豊臺杉邨翁亦最大矣乎翁名財字公成通称修平三河碧海郡棚尾村人考曰弥四郎鬻藥為業以天保九年戊戌十二月生翁幼而機敏常

裏面

門人建之

岡崎町 杉浦権太郎

石工 刻字 奥瀬兼吉

羽佐田徳次郎

好読書師僧秀階受句読学書法三宅洪庵年甫十九奮然立志至名古屋入奥田大観之門研究經史又就麻生白處修蘭学更從柳田良平專学医術淬磨砥礪留為十季学成帰郷則以医開業傍講聖賢之学授徒名籍甚履滿門無幾應菊間藩侯召為二等医偶当明治革新之際生徒益多及数百人於是教育愈務將爐冶英才補翼国運日夜匪勉誘導亦至矣今也齡躋古稀其徒相謀欲刻石以衆多年薰陶之恩遠寄状問余余乃託之併作頌曰

資性温厚 古謙古約 藹藹杏林 芬馥堯萼  
 豈管刀圭 將暨民瘼 追聖慕賢 育英是樂  
 年及杖国 身益矍鑠 吟詩啜茶 餘裕綽綽  
 噫此寒鄉 始振木鐸 顯晦任命 獨全天爵  
 明治四十年秋九月 鴻齊居士 石川英撰 池田友八郎書

懿文德禪 正二位勳一等伯爵 東久世通禮篆額

孟子天下の英才を得て之を教育するは君子の三業の一つと為す。況や仰いでは  
天に愧じず、俯しては人に忤じざるをや。豊臺の杉邨翁の如きは亦最も大なる  
かな。翁の名は財、字は公成、通称は修平なり。三河碧海郡棚尾村人考に曰く  
弥四郎葉を襲ぎて業と為し、以つて天保九年戊戌十二月生まれなり。翁幼くし  
て機敏、常に読書を好み、僧秀階を師として句読受け、書法を学ぶ。三宅洪庵年  
の甫十九にして奮然として志を立て、名古屋に至り、奥谷大観の門に入り、経  
史を研究し、又、麻生白處に就いて蘭学を修め、更に柳田良平に従いて専ら医  
術を学ぶ。淬磨砥礪留りて十季と為す。学成りて帰郷し、即ち医を以つて開業  
し、傍ら聖賢の学を講じ、徒に授く。名聲籍甚履門に満つ。幾ど菊間藩に應ず  
る無し。藩侯召して二等医と為す。偶々明治革新の際に当たり、生徒益々多く  
数百人に及ぶ。是に於いて教育し愈々務めて將に英才を爐冶し国運を補翼せん  
とす。日夜黽勉誘導して亦至れり。今や齡躋りて古稀なり。其の徒、相謀りて  
以つて衆多年の薰陶の恩を石に刻せんと欲す。遠きは状を寄せ余に問ふ。余乃ち  
之に託して併せて頌を作りて曰く

資性温厚 古謙古約 藹藹たる杏林 芬馥として蕁を発す

堂膏刀奎 特に民瘼を医せんとす 聖を追い賢を慕い 育英是樂じむ

年 杖国に及べども 身益すかくしやく 鬻鏢 詩を吟じ茶を啜り 餘裕しやくしやく 綽綽

噫あ此の寒郷 始めて木鐸を振ひ 顯晦けんかい命に任せ 獨り天爵を全うす

明治四十年秋九月

鴻斎居士 石川英撰  
池田友八郎

註

- ・君子の三樂 第一 家族の無事  
第二 自己修養  
第三 教育
- ・淬磨 磨くこと
- ・砥礪 励むこと
- ・名声籍甚 評判が高いこと
- ・屣 下駄の音
- ・黽勉 勉強すること
- ・杏林 医者之美称
- ・豈啻 それだけではなく
- ・杖国 「五十杖於家 六十杖於郷 七十杖於国」
- ・顯晦 明るいことと暗いこと

訳文 磯貝碧雲先生